
The end of summer

柚音 朋佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The end of summer

【Nコード】

N3470N

【作者名】

柚音 朋佳

【あらすじ】

夏の終わり、僕たちは探検に出た。最初はただの好奇心のほずだった……。大人になりきれない少年少女たちが織り成す、夏の終わりの、不思議な物語。

2010年8月23日 月曜日

蒸し暑い夏の風が網戸から入ってくる。

それは、軒下につるされた風鈴をチリンと小さく鳴らし、僕のＴシャツを小さく揺らした。

涼しさの欠片も感じなかった。

僕は二階の自分の部屋から居間に降りてきて、冬はこたつになる足の短いテーブルに歩み寄った。

上に投げられている煎餅を一枚つまみ上げ、袋を開けてかじった。少し湿気でしまっているそれを早々に胃袋に収めると、僕はテレビをつけた。

夏の昼下がりの家の中は、驚くほど静かだ。

両親は働きに行っているし、保育園児の妹は保育園で今頃昼寝中だろう。

小学生の方の妹は友達の家遊びに行き、ババアは自分の部屋で寝ている。

何もしなければ蝉の声しか聞こえない。

つい先ほど僕がテレビをつけたから、甲子園のバンブラと実況、歓声もそこに入り混じる。

テレビをつけたことで少しは和らいだ気もするが、こつも静かだと足音も立てたなくなる。

甲子園はつまらないのでチャンネルを変えた。

田舎の木造建築に合わない大きなプラズマテレビが、僕の前に鎮座している。

適当にチャンネルを回していると、ホラー番組が映し出された。

真っ暗な廃墟に数人の女が映っている。

そしてその後ろを白い何かが通り過ぎ、女たちが叫んで飛び上がった。

た。

さして面白くないやらせの番組だ。

でも、どうしてかそこでリモコンをテーブルの上に置き、扇風機をつけた。

次に映し出されたのは、これまた若い女性タレントが除霊を受けるシーンだった。

いかにもといった感じの霊能者のオバサンが何かをぶつぶつと唱えている。

僕はただそれをじっと見つめ続けた。

昼間に見るホラーは全然怖くない。

夜に見ると少しは違うのだろうか。

僕は畳の上に横になった。

眠くはない。

ただ、今ここで寝ることができたら、どれだけ退屈な時間を潰すことができるだろうかということをひたすらに考えていた。

我ながらわけのわからないことを考えるものだ。

テレビから聞こえてくる女の叫び声がだんだん耳障りになってくる。

僕は畳から起き上がり、ふらふらと冷蔵庫に向かった。

カチカチのアイスクャンデーも、冷蔵庫から出してしまえばとけるのは早い。

薄い透明な袋をぴりぴりと破って、中のアイスクャンデーをつまみ出してむさぼった。

やっぱりテレビは面白くなかった。

僕がアイスクャンデーを食べ終え、二本目…と冷蔵庫に向かうとしたときだった。

念のためポケットに入れておいたケータイが鳴った。

メールを受信した音だ。

静かな中に突然鳴り出した着信音に少し驚いたが、落ち着いてケータイを開いた。

ハヤト、と文字が表示されている。

小学校の頃からよくつるむ友達の名前だ。

『今お前んちの裏にいるんだけど』

「……………」

僕はケータイを閉じると、散らばっていた健康サンダルを履いて、勝手口を出た。

外に出ると、意外と涼しい、といっても風が少し通る程度で微々たる差だ。

家の裏手には、手入れはされずに毎日水だけが与えられているヒマワリ数本が、その巨体を揺らしていた。

ちなみに、太陽のほうは向いていない。

裏手の塀と塀の間に出入りのための小さな柵がある。

僕はその柵の鍵を外すと、自分の家の裏の道路に出た。

道そのものは狭いきちんと舗装された道がそこにある。

そして今はそこに、自転車にまたがったままのハヤトがいた。

「よう、何してたんだ」

「テレビ、見てた」

「ふうん」

「で、何か用？」

「あー、とりあえず上がらせてくれ。暑くて死にそう」

家にとりあがりたいたなら正面から来ればいいものを。

といつても、ハヤトが僕の家に来るルートを考えてみれば、裏に回ったほうが近いと言えは近い気もする。

暑くて死にそう、と言ったハヤトの派手なオレンジのTシャツの背中では、そこだけ色が濃くなっていた。

触りたくないほどにじっとりと汗が染み出ている。

僕はハヤトに触れないように勝手口に案内した。

僕は自分の部屋にハヤトを連れて行った。

エアコンはあるが今は機能していない。

僕はハヤトを適当なところに座らせると、立ったまま言った。

「何飲みたい？オレンジジュースか麦茶かポカリ」

「あー…」

ハヤトはしばらく唸って考えてから、「とりあえず全部持ってきて」と言った。

「じゃあ手伝えよ。3本も持ってこられるか、バカ」

「ああ、分かった。その前にクーラー入れてけ」

と言いつつ自分でリモコンを操作してエアコンを起動させた。しかも23度に設定しやがった。

いくらなんでもそれは寒いんじゃないか。

と言いつつも、僕の部屋は閉め切られていた上に窓が無駄に大きい。今家の中で一番暑い場所かも。

僕とハヤトは部屋を出た。

先ほどアイスクャンデーを取りに行った冷蔵庫にお邪魔する。

無言のまま冷蔵庫を開いて、ハヤトにオレンジジュースのペットボトルと、スポーツ飲料のペットボトルを渡した。

どちらも1.5リットル。しかも未開封。

ハヤトは眉一つ動かさずにそれらを抱えると、先に部屋に戻っていた。

僕も、麦茶のビンとコップを二つ持ってその後を追う。

麦茶がビンの中で揺れて、ちゅぷちゅぷと音がする。

冷たい麦茶のビンにしがみついた水蒸気が僕の手を濡らした。

戻ってきて自分の部屋を開けると、さっきよりはいくらかマシな室温になっていた。

だが、設定温度は23度のままだ。

僕はこっそり設定温度を25度まで上げておいた。

「うおー、冷たあー」

ハヤトがポカリのペットボトルを自分の額にあてがっていた。

「最初どれから行く？」

「オレンジ」

ペットボトルの中に満たされているジュースと同じ色のＴシャツを着たハヤトは、冷房が直当たりする位置に身体を動かした。

僕は、オレンジジュースを二つのコップに注ぎながら話した。

「で、何、俺の家にジュース飲みに来ただけか」

「違う違う、もつと違うハナシ」

「じゃあ、何」

僕はジュースの入ったコップをハヤトの近くに置いた。

「あー…何て言えばいいんだろ、課外活動？」

「あん？」

ハヤトは一気にオレンジジュースを飲み干し、コップをそばに置いた。

それを見て僕も、自分のジュースに口をつけた。

ハヤトの視線の先に、大きな窓があった。

その向こうには、小さいがベランダがある。

小さいころは、よくそこで天体観測をした…ような気がする。

「簡単に言うとな、探検よ、探検」

「探検？」

探検、なんて言葉を口にしたのは久しぶりだった。

小学生の頃、近所の空き家に探検と称して不法侵入し、みんなで秘密基地を作った思い出がある。

今はどうなっているんだろう、と何年か前の思い出に浸っていると、ハヤトが口を挟んできた。

「南小の裏にさ、防空壕があるだろ」

「ああ…」

南小学校は、僕たちが卒業した小学校だった。

最近耐震工事をしたらしく、僕たちの知っている南小よりはだいぶきれいで新しくなっている。

使用されなくなった木造の旧校舎１年前に取り壊された。

その旧校舎の裏に、戦時中に作られた防空壕があった。

ここは田舎だったから、その防空壕がほとんど使われることはなく、

埋められることもなく現在に至る。

防空壕への入り口は、重い鎖と大きな錠前できっちりと閉じられていた。

針金を持ち出して、何度もこじ開けようとして先生に怒られたものだった。

「その防空壕がどうしたんだ」

「そこに入る」

「・・・はあ？」

「そこを探検するんだよ」

ついに夏の暑さに頭をやられたか、ハヤトも末期か。

僕はもう一杯オレンジジュースをあおってから、「馬鹿だろ」とつぶやいた。

「まあ聞けよ」

「・・・」

「この間親父にあの防空壕の掃除に連れて行かれたんだけどな、そういえばハヤトの父親は町役場の役員だった。

たまに仕事を手伝わされて困る、とかぼやいていた記憶がある。

また手伝わされたんだなコイツ。

「その時初めてあそこに入ったんだけど、どうもあの防空壕、道があるらしいんだ」

「道？」

「そう、洞窟みたいにつながってるんだ」

「・・・そこを探検しろ？」

僕はあの防空壕には入ったことがない。

入ってみたいともあまり思わなかった。

だが、防空壕に道が続いていると言うのもそれはそれで興味深い話ではある。

「・・・って、脱出用の抜け道とかじゃないのか？それ」

「脱出用の抜け道にしたって、どこに出るか気になるだろ？」

「・・・まあ、それは・・・」

正直、気になる。

「あつ、もしかしたらお室とか眠ってるかも」
それはないだろ。

「じゃあ、決まり。他の奴にも声かけとくから」

「いつ行くんだ？」

「んー・・・明日とかどうよ」

唐突ではあるが、暇ではある。

宿題は残っているが。

「分かった」

「よし。そんじゃ、明日迎えに行くから」

「ああ・・・」

ハヤトは自分でオレンジジュースを注いで、ごくごく喉を鳴らして飲んだ。

僕は部屋の本棚の隅から、買いためてあるスナック菓子を取り出し、袋を開いた。

3人や4人ならともかく、2人しかない時って、何となくその場の空気が気まずい。

話題が途切れると、どっちかが話題を振るまではだんまりが続く。それは例外なく今回も同じだ。

ハヤトは数秒間隔でスナック菓子を口に運び、時折エアコンに視線を変えながら僕の部屋に居座っていた。

しばらくすると、思いついたように突然ハヤトが口を開いた。

「あ、ユキ」

「何だよ」

ユキというのは俺の名前だ。

学校の友達にも、親戚にもそう呼ばれている。

勘違いされないように一応言っておくと、俺のフルネームは「寒田ユキヒコ」だ。

「弁当は持って来いよ」

「何で」

「もしかしたら昼まで、いや、洞窟の中で一泊することになるかも」
「ふざけんな」

「分らんよ、現代人未踏の地だから」

ハヤトはわざとらしく腕を振った。

未踏の地、ねえ・・・。

「そういえばハヤト、鍵どうすんだ。鍵かかってただろ、あそこ」

「ああ、そこはもう大丈夫」

そう言っただけでハヤトはポケットから細長い鍵を取り出した。

こんな形の鍵を首から下げた漫画のキャラクターがいた気がする。

鍵には、よく分からない数字が書かれたタグがついていた。

管理番号のようなものだろう。

「パクって来たのか」

「親が役場勤め、ってこういうとき便利だよなあ」

「どうせならもつといい事に役立てろ」

僕ははつきりと釘をさしておくと、防空壕の鍵を指で弾いた。

ジャリ、とさび付いた音を立てて鍵が揺れた。

僕たちの、夏の終わりが、始まった。

2010年8月23日 月曜日(後書き)

青春モノが描きたくなっ たんですっ てば・・・！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470n/>

The end of summer

2010年10月10日16時35分発行